

メッセージアウトライン 民数記14:1~38 「信仰と不信仰」

「13章の要約」

モーセは主の命によって、パランの荒野(カデシュまたはカデシュ・バルネアとも言う。→13:26,32:8)から約束のカナンの地を探らせるために、イスラエル各部族の族長たち十二人を偵察に送り出した。(1~20)

彼らは上って行ってカナンの地を南から北まで詳しく調べた。たぶん彼らは数人ずつのグループに分かれて、旅行者のようなふりをして、あやしまれないようにしたのであろう。四十日間彼らはカナンの地を偵察してパランの荒野にいるモーセとアロンおよびイスラエル人たちの所に帰って来た。(21~25) 彼らは報告して言った。(26~29)

① そこには確かに乳と蜜が流れている。これは自然の資源が非常に豊かな地であるということ。彼らは取って来た果物を見せた。→13:23二人が棒で担がなければならないほどの一房のついた枝のぶどう。また、ざくろやいちじく。

② その地に住む民は力が強く、その町々は城壁があつて非常に大きく、そのうえ、そこでアナクの子孫を見た。アナクとは巨人のこと。身長は3メートル前後であつたと思われる。

③ そこにはアマレク人、ヒッタイト人、エブス人、アモリ人、カナン人が住んでいる。つまり、人の住んでいない所はないということ。そこにイスラエル人が入って行けば必ず戦いとなるだろう。

要するに土地や自然環境は良いが、その町々は堅固で住民は大きく、強そうだということである。

その時、偵察に行った者の一人カレブ、彼はユダ部族の族長であつたが、報告を聞いて動揺している民を静めて、「私たちはぜひとも上って行って、そこを占領しましょう。必ず打ち勝つことができます」と言った。(30) 信仰に立った立派な発言である。エフライム部族のヨシュア(ホセア[8])も同じ考えであつただろう。(14:6,30)

しかし、他の者たち、つまり十二人のうちの十人は「あの民のところには攻め上れない。あの民は私たちより強い」「私たちが行き巡って偵察した地は、そこに住む者を食い荒らす地で、そこで見た民はみな、背の高い者たちだ。私たちは、そこでネフィリムを、ネフィリムの末裔アナク人を見た。私たちの目には自分たちがバッタのように見えたし、彼らの目にもそう見えただろう」と悪く言いふらした。(31~33)

「そこに住む者を食い荒らす地」…戦いを仕掛ければ逆に打ち負かされて、財産も家族もすべてのものを失うことになりかねない恐ろしい地という意味。「ネフィリム」…巨人のこと。「アナク人」はその一民族。

[14:1]「すると、全会衆は大声を上げて叫び、民はその夜、泣き明かした」

これらのことばを聞いたイスラエルの民は全くの絶望に陥った。

[2-3]「われわれはエジプトの地で死んでいたらよかった。あるいは、この荒野で死んでいたらよかったのだ」 彼らはみな、指導者のモーセとアロンにこのように不平を言った。さらにその矛先を神にまで向けて、「なぜ主は、我々をこの地に導いて来て、剣に倒されるようにされるのか。妻や子どもは、かすめ奪われてしまう。エジプトに帰るほうが、われわれにとって良くはないか」とまで言う。

モーセとアロンのみではなく、神ご自身まで非難の対象とする恐るべき不信仰の姿である。

[4] さらにそれは神への現実的な反逆となって現れ、「さあ、われわれは、かしらを一人立ててエジプトに帰ろう」とまで言い出したのである。

[5]「そこで、モーセとアロンは、イスラエルの会衆の集会全体の前でひれ伏した」

これはモーセとアロンが、自分たちのやってきたことが間違っていた。申し訳ない、すみませんと謝っているのではなく、民の不平不満、反逆、不信仰を嘆き、神のみ前にとりなしの祈りをしているのである。

[6-9] この時、現地を探りに行った十二人のうちヌンの子ヨシュアとエフンネの子カレブは民の態度に心を痛め、自分たちの着物を引き裂き、民を説得しようとした。「わたしたちが巡り歩いて偵察した地は、すばらしく、良い地だった。もし主が私たちを喜んでおられるなら。私たちをあの地に導き入れ、それを私たちに下さる。あの地は乳と蜜の流れる地だ。ただ、主に背いてはならない。その地の人々を恐れてはならない。彼らは私たちの餌食となる。彼らの守りは、すでに取り去られている。主が私たちとともにおられるのだ。彼らを恐れてはならない」

これはまさに彼らの信仰から出たことばである。人間的に見れば、たしかにカナン
の地の住民は恐るべき民族であった。しかし、ヨシュアとカレブは神がともにおられることと、神のみわざの確かさを、これまで何度も体験してきているので、彼らを見て恐れたり、しり込みしたりすることはなかったのである。それで「彼らは私たちの餌食となる」とはっきりと断言できたのである。他の十人も同じ神のみわざを今まで体験してきたはずであるが、この違いはいったいどうであろうか。

[10-12] ヨシュアとカレブの必死の説得にもかかわらず、イスラエルの民は悲観的になり、彼らを石で打ち殺そうと言い出した。彼らもここに至るまで多くの神のみわざを経験してきているのに、まったくそれらが頭から抜け落ちて、目の前の情報だけで判断して落胆し、信仰に立った発言をするヨシュアとカレブを殺そうとする。恐るべき群集心理、恐るべき不信仰である。しかし、そのとき主の栄光が会見の天幕からすべてのイスラエル人に現れた。これは燃え盛る火のような栄光であったであろう。彼らは目の前の状況だけを考えて、彼らを今まで守り導いてきた主なる神のことをまったく考えていなかった。神の契約の民であるイスラエルがこの状況である。

しかし、神は生きておられる。主なる神は事の一部始終をすべてご存じで、ついにイスラエルのこのような不信仰に対して怒りを発せられたのである。主は疫病で彼らを打ち滅ぼして、ゆずりの地を剥奪し、モーセを彼らよりも強く大いなる国民とすると言われた。

シナイ山での金の子牛の偶像礼拝の事件の時も、主は同じようなことばをモーセに語られている。

→出32:10

[13-19] この主のことばに対してモーセはまたも民のために全力でとりなしをしていく。彼のとりなしの要点は、

①この地の住民、すなわちこのシナイ半島に住む住民たちは主なる神がイスラエルの民をエジプトの地から導き出され、昼は雲の柱、夜は火の柱のうちにあって民を守り導いておられることを聞いています。(13-14)

②そのイスラエルの民を主が一人残らず殺すなら、異邦の民は「主はこの民を、彼らに誓った地に導き入れることができなかつたので、荒野で殺したのだ」と言うに違いありません。(15-16)

「異邦の民」とはシナイ半島の住民だけではなく、カナンの地の住民をも含むと考えられる。

③彼は「主は怒るのに遅く、恵み豊かであり、咎と背きを赦す。しかし、罰すべき者を必ず罰し、父の咎を子に報い、三代、四代に及ぼす」との主のことばを引用し、「どうかこの民の咎をあなたの大きな恵みによって赦してください」と主の恵みに訴え、みことばの約束にすぎる。(17-19)

[20] すると主はモーセの熱心なとりなしの祈りを聞き入れてくださって、「あなたのことばどおりに、わたしは赦す」と言われた。これはイスラエル人全員を即座に全員滅ぼしてしまうことをとどめられたという意味である。

[21-23]しかし主は言われる。「わたしが生きていて、主の栄光が全地に満ちている以上、私の栄光と、わたしがエジプトとこの荒野で行ったしるしを見ながら、十度もこのようにわたしを試み、わたしの声に聞き従わなかつた者たちは、だれ一人、わたしが彼らの父祖たちに誓った地を見ることはない。わたしを侮った者たちは、だれ一人、それを見ることはない」

イスラエルの民はエジプトで主が十の災害でエジプトを打たれたこと、紅海の水を分けてエジプトを脱出させてくださったことを見た、経験した。そしてこのシナイの荒野でも超自然的に水が与えられ、天からのパン(マナ)が滞ることなく与えられ、肉もいやというほど食べることができ、そのようにして今日まで守られ導かれて来た。それなのに、次々と彼らは不信仰に陥つたのである。

「十度もわたしを試みて」とあるが、確かに十回も彼らは主なる神に対して不信仰のつぶやき、反逆をしているのである。→①出5:21②14:11③15:24④16:2-3⑤1

7:2~3、7⑥32:1⑦民11:1⑧民11:4⑨民12:1⑩民14:2 またこの「十度」は繰り返し、何回でもという意味でもあろう。

主は恵み豊かなお方であるが、また罰すべき者は必ず罰するお方である。主は彼らに対して、彼らの先祖に誓った地、カナンの地を見ることはない、すなわちその地に入ることができないと言われたのである。その具体的なさばきは26節以下。

[24]「ただし、わたしのしもベカレブは、ほかの者とは違った霊を持ち、わたしに従い通したので、わたしは、彼が行って来た地に彼を導き入れる。彼の子孫はその地を所有するようになる」

たしかにヨシュア記14:6以下を見ると、このことが実現していることが分かる。そして同じく信仰をもって約束の地に入るべきことを主張したヨシュアもまたカレブ同様に生き残る者となる。→30, 38

[25]そして主は「平地にはアマレク人とカナン人が住んでいるので、あなたがたは、明日、向きを変えてここを旅立ち、葦の海の道を通って荒野へ行け」と言われた。「平地」とは今イスラエルがいるパランの荒野から北上していく途中にある地のこと。平地といってもそこは谷や起伏に富んでいる地である。

「葦の海の道」とは死海の南からアカバ湾に至る荒野を南北に走っている道のこと。アマレク人やカナン人が住んでいる地へ北上するのではなく、方向転換をして南へ下れというのである。彼らは不信仰の結果として、約束の地から遠ざかって行かなければならないのである。

[26-36] 主はイスラエルの民に対する具体的なさばきをモーセとアロンに告げられる。

「わたしは必ず、おまえたちがわたしの耳に語ったとおりに、おまえたちに行く。この荒野におまえたちは、屍をさらす。わたしに不平を言った者で、二十歳以上の、登録され数えられた者たち全員である」(28~29) カレブとヨシュア以外はだれ一人はいることができない。(30)「かすめ奪われてしまう」(3)とっていた子どもたちを約束の地へ導き入れる。(31)

カナンの地を偵察した日数が四十日であったので、一日を一年と数えて四十年間彼らの子どもたちは荒野で羊を飼う者となり、二十歳以上の者が死に絶えるまで、彼らの背信の責めを負う。

一つになって主に逆らった悪い会衆のすべてはこの荒野で死に絶える。(32~35)

「…帰って来て、その地について悪く言いふらし、全会衆にモーセに対する不平を言わせた者たちもだ」(36) これは偵察に行った十二人のうちの十人のことである。

[37]「こうして、その地を悪く言いふらした者たちは、主の前に疫病で死んだ」

これは直接的な主のさばきであった。

[38]「しかし、あの地を偵察しに行った者のうち、ヌンの子ヨシュアとエフンネの子カレブは生き残った」これも主の約束のとおりである。

私たちは今日の個所からどのような教訓を学ばなければならないか。それは、事実は一つであっても、それに対して信仰と不信仰という二つの面から見ると、出て来る答えは全く違うということである。

モーセのとりなしによって不信仰な民の即座の滅びは免れるが二十歳以上の者たちはカレブとヨシュア以外の者は皆、荒野で倒れて死に、約束の地に入れない。そしてその子どもたちが入ることとなる。

私たちがたとえ、目の前の現実が山のように困難なことであったとしても、イスラエルの民のように不信仰になって投げ出して、主の怒りを買って、さばきを受けてしまうような者になるのではなく、カレブとヨシュアのように信仰をもって主の約束なのだから、主がともにいてくださるのだから必ずできる、大丈夫だと確信し、前進していくことが大切である。そしてそのように歩んで行く時に、主なる神の豊かな祝福を味わうこととなるのである。

→ I コリント10:1～11, ヘブル3:12～19、11:1